

## 文学の創造と人間形成

井出賢次

私はただ、ひとりで私の中から生まれ出ようとしたものを生きてみようと思っただけだ。それがなぜこんなにも難かしいものだったのだろう

### 「デミアン」

右はヘルマン・ヘッセの小説「デミアン」の冒頭部分であります。少年のころ読んだ小説の主人公デミアンの生き方が私に与えたショックは、その後の私の人生、生き方に大きな影響を与え、五十年後の今も初めて読んだ時の衝撃的な印象がまざまざと浮んできます。

第二次大戦の末期、海軍航空隊の一員として純粹に教えられるままに、生命を国に捧げることが当然と考え、きびしい訓練に明け暮れていた時に敗戦を迎え、復員後暫くして再び中学校に戻ったものの、余りにも急激な価値観の変動を経験し、權威あるものを一切信じられず、放心、虚脱、虚無の心境にあった十六歳の少年の私に「自己に忠実に生きる」ことの尊さと自分のために生きることの大切さを教えてくれた作品の一つであります。自分の目で見、耳で聞き、心で感じ、頭で考え、自らの判断で行動する生き方を考えさせてくれました。

小説に描かれた人間の生き方が、現実にも悩み苦しむ人間に及ぼす影響がいかに大きいものであるかを如実に示してくれた作品であります。暗闇の中で進むべき一筋の光を与えてくれました。勿論、他の小説と同様に「デミアン」もヘルマン・ヘッセのフィクションによって創り出された人物であります。しかし、虚構によって創造された人間の真実は、生きた人間の魂をゆさぶり、現実の世に生きる一個の人間の生き方や考え方を変える力を持っているのです。私の人生の中でその折々に、数多くの書物が考えることの大切さや生きる力を与えてくれました。

この講座では私の読書体験をもとに、主として日本の近代文学の中で創り出された人間像を通して、個々の作家がそれぞれの作品の中でどのような人間、文学を創り出してきたかを考えてみたいと思います。

### 新しき文学・人間の創造

#### ○小説（散文）にみる人間像

新しい文学の創造は、古くは「土佐日記」にもみられます。

「男もすなる日記といふものを女もしてみんとするなり」にはじまる「土佐日記」で紀貫之は、日記に虚構性をもたせ、従来の男性の日記である公用的、備忘録的な漢文体による日記から、女性に仮託することによって仮名文を用い、私的、文藝的、創作的な日記文学を創り出し、後の女性の日記文学に大きな影響を及ぼすとともに、平安朝女流文学全盛の機運をもたらしたのは周知の事実であります。

さて、近代に入ってから、坪内逍遙は江戸時代以来引き継がれてきた伝統の戯作文学を否定し、「小説神

髓」(明治18年)を書き、新文学宣言ともいふべきすぐれた啓蒙的な評論を発表し、特に次の二点で画期的な文学論を展開しました。

一つは「文学は道德や政治に直接役立つものではなく、芸術という功利性から独立した世界を持つ」という文学独立説であります。文学が独立した価値をもつという考えは、今では常識であり、当然のこととなつていますが、当時としてはきわめて斬新な、独創的な考え方でありました。

もう一点は「小説の主脳は人情なり。世態風俗これに次ぐ」にはじまる小説が芸術であるためには、まず人情―人間の情欲―の内奥の真をうかがつ写真に徹しなければならぬとする写真主義の提唱であります。時に逍遙は二十六歳の若さでした。

この評論の考えをもとに小説「当世書生気質」を同じ年に発表しました。その冒頭に「近ごろ都てふえたものは人力車と書生だ」と述べ「書生」という新しい人間を取り上げ、発表当時は大変な評判になりました。しかし着想には新しさがあり、当時の書生(大学生)の姿は書いていましたが、描き方が戯作風であつたといわれるように、内容的には逍遙が考えていた評論の域にはとどいていない小説だつたと言えます。

逍遙の「小説神髓」に刺激され、共感の思いを抱いた二葉亭四迷は「小説総論」(明治19年)において「凡そ形(フォーム)あれば茲に意(アイデア)あり、意は形によつて見はれ、形は意によつて存す。……」「模写といへることは実相を仮りて虚相を写し出すことなり」に見られる本格的なリアリズム論を展開し

ます。しかも逍遙と同様に自らの評論の実証ともいふべき小説「浮雲」（明治20年）を書き、最初の言文一致体による作品を発表、日本における最初の本格的な近代小説ともいわれています。

平凡な日常生活における普遍的な人間の真実の姿を内側から照らし出そうと試みた小説であります。下級官吏の一青年を主人公に、従妹にあたる恋人とその母、同僚で世才にたけた男など、その時代のさまざまな人間を描いて過渡的な社会相を写し出すとともに、近代化されたばかりの時代に生きた誠実だが決断力のない主人公が免職になり、エリートコースから挫折し、恋人も失ってしまう主人公「文三」の苦悩と心理を追求、挫折ゆえの自我を見つめる人間の運命を創り出しています。

市井に生きる平凡な人間の内面をえぐり出すことによって、近代小説の夜明けを告げる作品となっています。

しかし、すぐれた内容をもつ作品でありながら、時代に先んじて書かれた言文一致の文体が当時の文壇に受け入れられず、未完のまま終ってしまいました。「浮雲」が理解されてその価値が認められたのは明治三十年代の終りで、作者が晩年を迎えてからでした。なお、第一、第二編とも、本の表紙や扉には坪内雄蔵（逍遙）とされていて、そんなところにも近代の夜明けだった時代が感じられます。二葉亭四迷が全く無名の青年だったために、有名人であった逍遙の名を借りたところに原因が求められます。

ドイツ留学から帰朝した森鷗外は、少し遅れて「舞姫」（明治23年）を発表します。

西欧の自由な雰囲気に触れ、近代的な自我に目ざめかけながら、当時の社会風潮の中で

嗚呼、余は此書を見て始めて我が地位を明示し得たり。恥かしきはわが鈍き心なり。余は我身一つの進退につきても、また我身に係らぬ他人の事につきても決断ありと自ら心に誇りしが、此決断は順境にのみありて逆境にはあらず。我と人との關係を照らさんとするときには、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

と主人公太田豊太郎の述懐にもあるように恋人エリスとの關係を友人に託したがゆえに結局は當時の社会風潮の中で、目ざめかけた自我が挫折し、恋人のエリスを捨て、狂氣に迫りやり、心の底に人間として一生いやしがたい傷を負いながら、若き近代日本国家の中枢となるべき立身出世の道をたどるために帰国する姿が描かれる。いわば明治の近代国家建設途上のエリートの典型的な人間像を創り出しています。主人公が恋人エリスを捨て、立身出世のコースを選び、しかも友人を恨むという筋書きの「舞姫」が百年後の今日も多くの人に読まれているのは、主人公の生きた時代ゆえの苦悩を描き、愛するものを捨てなければならぬということが、どんなに悲しく痛ましいことなのか鮮やかに描き出されているからだと思います。

「舞姫」は人間にとって何が最も大切なものであるかを痛切に教えてくれ、深い感銘を与えてくれるとともに、人生のこと、生きるということをさまざまに考えさせずにはおかない作品であります。

明治三十九年、島崎藤村は詩人から訣別し、小説「破戒」を自費出版しました。日本の自然主義文学運動の本格的な出発点を示す作品として当時の人々に大きな感銘を与えました。前の二人の作品が書かれてからほぼ二十年、勝利に終わった日露戦争後の、明治の近代国家の基礎がほぼ固まったところに書かれた作品

であります。列強の仲間入りをしたと考えられ、政治や経済や機械文明の発達とそれに伴う社会の矛盾が表面化する時代ともいえる時期に発表されました。

周知の事と存じますが、「破戒」は社会に不当に差別される被差別部落出身の青年丑松の心理を迫真的に描くことに成功した作品で、当時の外部の社会的現実と内部の心理的現実とを均衡させた本格的な近代小説であります。

主人公の丑松は被差別部落出身の小学校教師で、どんなことがあっても自分の身分を隠すように父から強く戒められていました。しかし、社会の偏見と不当さに目ざめ、惨死した先輩の生き方の中に新しい理想を自覚し、自己の虚偽に目ざめ、自己自身を告白するようになります。それは世の中の価値を一切峻拒し、新たに自己の倫理を確立しようとする姿でもありました。

主人公丑松の自己変革のドラマを描くことを通して、近代社会の矛盾とその不条理を明らかにした外部と内部、社会と自我とのリアリズムが対決しながら総合されている本格的な小説で、近代文学の中でも画期的な意義をもつ作品であります。自我と闘い、悩みもたえながら「自我」に目ざめてゆく青年の姿が、鮮やかに描かれています。自らに忠実に生きようとする主人公の生き方が、自己形成のきびしさと勇氣をもつて生きることの大切さを示唆してくれます。

大正期に入って理想主義、人道主義をかけた白樺派の作家である有島武郎は「或る女」(大正8年)で、新しい自我に目ざめかけながら、自分には生きる方向がわからず、社会も家族もどう扱うべきかを知らな

い時代に生まれた一人の鋭敏な急進的な女性「早月葉子」を主人公に据え、時代に先<sup>が</sup>けて近代に目<sup>ざ</sup>めた新しいヒロインとして描いています。真実に生きようとした<sup>が</sup>ゆえにこうむらざるを得なかつたさまざまな苦難と、あげくの果てに野性的な男との愛欲の世界に溺れ、破滅する悲劇で終る作品であります。

間違つてゐた。……こう世の中を歩いてくるんじなかつた。然し、それは誰の罪だ。分からない。然し兎に角自分には後悔<sup>が</sup>がある。(中略)自分はいかにしても生きるべきでない時代に、生きるべきでない処に生まれてきたのだ。そこでは自分は女王の座になおつても恥かしくない程の力をもつことが出来る筈なのだ。生きてゐる中に、そこを探し出したい。

と主人公に悲痛な叫びを吐露させています。

新しい女を創造しながらも、先駆者ゆえに世間にも本人にも生き方<sup>が</sup>わからず、しかも自己をいつわることも、いい加減なところで周囲と妥協できなかつた悲劇の女性を創り出しています。

上流社会の娘として生まれ、新しい教育を受けて、自我に目<sup>ざ</sup>めた女主人公<sup>が</sup>、家庭、社会、宗教等の旧るさや偽善とたたかい、あくまでも自主的に生き抜こうとしますが、自分の本当の生の目標<sup>が</sup>つかめないままに自己を破滅させてしまう進歩的な女性の悲劇<sup>が</sup>リアルに描かれており『日本リアリズムの代表作』(本多秋五)ともいわれています。

時代に先<sup>が</sup>けて自由な近代に目<sup>ざ</sup>めた<sup>が</sup>ゆえに、破滅の道をたどらざるを得なかつた主人公<sup>が</sup>であります。女性の解放、女性の人間性の尊重等、以後の人々に大きな影響をもたらした小説ともいえます。

昭和十一年に阿部知二は「冬の宿」で、肉体と精神との対立と葛藤を象徴的に描こうとつとめながら、昭和十年前後の暗い時代の知識人の姿を描いています。結局は非情な傍観者でしかあり得ない行動の一手前で迷う大学生の主人公の姿に、戦争へと傾斜していく思潮の中におかれた人間の懷疑的な生き方が知的な構成で描かれた作品で、当時の知識人の共感をよんだ人間像が創り出されています。

軍国主義一辺倒に彩られて、自由な考え方や行動の許されない雰囲気の中で、身動きもできなくなっていく状況下の知識人の暗い思いを感じさせ、時代と人間の生き方が、いかに深い関連で結ばれているかを語りかけています。平和な自由な今の時代では考えられない暗い時代に生きざるを得なかった人間の姿を描き、時代がいかに人間の生き方を抑圧するかを考えさせる作品となっています。

戦後になって戦争をテーマにした小説が書かれ、ぎりぎりの局限下の人間の生き方を描いたすぐれた戦争文学が数多く発表されました。が、ここでは大変に話題となった作品の一つあげますと、芥川賞も受賞した石原慎太郎の「太陽の季節」（昭和30年）は、文学であるよりも一種の社会現象として「太陽族」という流行語を生み、慎太郎刈りを流行させ、戦後文学特有の暗鬱な眼ざしのない若者の肉体より発する解放的な心情の吐露が、同年代の若者に熱烈に支持されました。

K学園高校三年生の主人公「津川龍哉」を主人公に従来は全く考えられもしなかった若者の世界が創り出されています。

そこでは、青春にとって最も重要な「愛」も「友情」も「その下には必ずきつちりと計算された貸借対



照表があるはずだ」と作者は自己の世代の実態を残酷なまでの眼で凝視して、その栄光と悲惨とを描いています。

この作品のなかの若者たちの大胆で奔放な「悪徳」は「僕らはこの乾いた地盤の上に知らずと自分の手で新しい情操とモラルを生み、そしてその新しきものの内、さらに新しい人間が育って行く」と作者は堂々と宣言しています。『これほど積極的で肯定的な文学は、曾て日本の近代文学史上に現われたことはなかった』と中村真一郎は述べています。

太陽の煌めく海を帆走するヨットは、社会の既成価値を拒否する若者たちの自由の証であり、世間の常識をとり越え、既成の道徳を否定する肉体的、行動的、背徳的な若者の自由奔放な生き方をリアルに描いています。

この作品は発表当時、教育者や母親たちから非難の声が上がり、取締当局も問題にしたと言われています。作者より四歳年上であつた私ですら、この若者の生き方には観念的には理解できても、とてもついていけない世界であり、違和感を覚えた小説であつたと記憶しています。戦争を直接体験したものと、ほとんど体験しなかつたものとの感覚は、僅か数年の隔たりが大きな考え方の相違となることを示してくれました。

戦争という悲惨な暗い世界や、戦争の傷跡を全くとどめない戦後の解放と自由の風潮の中で出現した若者像であつたといえます。

## 新しい詩歌の創造

明治十五年、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三名によつて、我が国の近代詩が誕生しました。「新体詩抄」の公刊がそれであります。訳詩十四篇、創作詩五編を収め、序文に矢田部は「西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ風ヲ作り出セリ」と宣言、従来の伝統的な和歌・俳句と異なる詩型を創り出しました。外山はその序文で「甚だ無礼なる申し分かは知らねども、三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り尽すことの出来る思想は、線香花火か流星位の思いに過ぎざるべし。少しく連続したる思想内にありて鳴かんとするときは固より斯く簡短なる鳴方にて満足するものにあらず……」と新しい形式の詩体のもつ意義を高らかに述べ、長詩形採用の必要性を説いています。内容的には芸術的な価値は乏しいものの、西洋の詩を始めて移植し、新しい詩形を生み出した歴史的意義はきわめて大きいといえます。当時の批評家、識者からは用語の杜撰さ、原作理解の不徹底等の欠陥を指摘されながら、広く坊間に流布するに至ったのは、向上の意気に燃えていた明治初期の日本人は新時代の情懷を述べるにふさわしい新しい自由な詩体を求めていたからだといえます。

明治三十年代の浪漫主義の絶頂を示すものは散文よりも詩歌にみることができます。詩の分野では島崎藤村の「若菜集」（明治30年）の刊行であります。この詩集は「おどき苦闘」を経た藤村の願いのこめられた抒情詩で、奔放な青春の情熱を高らかに歌いあげ、当時の青年達に新鮮な感動をもたらし、日本近代詩の黎明を告げる詩集としての位置を得ています。

次いで「一葉舟」「夏草」「落梅集」を世に問ひ、四つの詩集をまとめた「藤村詩集」（明治37年）の序文で

遂に新しき詩歌の時は来りぬ。そは美しき曙のごとくなりき。……うら若き想像は長き眠りより覺めて民俗の言葉を飾れり。伝統はふたたびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を帯びぬ。……こころみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。……思へば言ふぞよき、ためらはずして言ふぞよき。」と書いていますが、この序文こそまさに近代詩の浪漫詩の夜明けを告げる叫び声であり、近代詩の先頭に立つものであります。

「潮音」や「初恋」をはじめほとんどの詩に見られるように七五調の流麗な調べを中心とした「若菜集」、「千曲川旅情のうた」や「椰子の実」など莊重な五七調の「落梅集」、そのいずれもが青春の哀歎を歌い上げ、新しい詩体による芸術的な香氣も高い作品を創り出し、「新体詩抄」の思いが、藤村によつて結実したともいえます。

同じ頃、短歌の世界では「明星派」の出現を見、浪漫主義短歌の開花を見ました。与謝野晶子の「みだれ髪」（明治34年）は西欧近代唯美主義の影響を受けて、人間の解放を大胆にうたった官能的な恋愛至上、芸術至上の浪漫主義を高らかに歌いあげています。

やは肌の熱き血潮に触れも見て

さびしからずや道を説く君

春短かし何に不滅の生命ぞと

力ある乳を手を探らせぬ

等にみられる従来の和歌の世界では考えられもしなかった大胆な発想のもとに、青春のほとばしりともいえる奔放な官能を表現しています。浪漫主義の世界は小説よりも詩歌の世界ではなばなく開花をみております。

#### まとめ

我が国が近代化の歩みをはじめてから百三十年、それぞれの時代に生きた作家が、自らのテーマのもとに創作し、多くの小説や詩歌を世に問うています。作者の虚構（フィクション）によって描かれた真実の世界をどう読み、どう理解し、自らの人間形成に役立てていくかは、読者一人ひとりの判断にゆだねられています。人生において私達は現実の生活から学ぶことと作品の世界から学ぶこととの両面があります。すぐれた書物に触れることによりよりよい生き方を求め、自らの人生を充実させることができます。心豊かな人間形成をするために読書は欠くことのできないものといえます。